



研究室紹介

UDC 061.62: 711

原(広)研究室

当研究室は昭和44年に開設された。池辺研究室と建築計画学的な研究分野を共有している。現在の構成員は、原広司助教授、田村助手、林技官、大学院生として、博士課程に4名、修士課程に2名、研究生が5名である。原助教授は、建築設計の実践活動も行っているので、研究の範囲は、基礎的な研究から計画理論の段階、実際の建築、都市設計の段階に広がっている。具体的には、基礎的研究としての活動等高線論、実践への橋わたしとなる経験的な研究である住居集合論、実践的な住宅地あるいは住宅設計の理論と実際といった3つの段階とそれに対応した3つのテーマをもっている。現段階では、それぞれのテーマ別研究が完結してはならず、従って3段階のテーマの連けいが完成されているわけではなく、それぞれのテーマを個別的に追求している。直截に言えば新しい住環境像が生れつつある現在、好適な環境を形成するための新しい方法論を探っているといえる。

1. 活動等高線論 この研究は、都市あるいはある地域の活動諸状況を等高線図に表現することによって、活動の動態をとらえ、将来予測を可能にしようとする意図のもとにはじめられた。具体的には閉曲線および閉曲線の集合をどう把握してゆくかが課題であり、この課題に対して解析的アプローチとは別に幾何的なアプローチを試みている。これまでいくつかの幾何学的な性質、動態把握の技法が見出されている。研究のイメージは、閉曲線のリッジという一種の中心概念を頼りに、展開しているが、現時点ではリッジの技わかれが、どのような閉曲線の状態のもとでおこるかに関心が集まっている。これはある種の構造安定性にかかわる問題で、変動を理論づけてゆく過程ではかなり重要なキポイントであると思われる。これについて教養学部の数学の伊原助教授などに相談しつつ、なんらかの解明をしたいと努力しているが容易に展開の緒を見出せないでいる。この問題の外、研究室で名づけている平衡発展の形をもった標準型と現実の等高線が示しているかたちとのずれをどう計量化あるいは定性化してゆくかがこれからの課題である。この課題にたいしては、閉曲線が描く帯のリッジが技法上の手段になると予想している。研究室では、ポテンシャル論との重ね合せ、位相幾何との重ね合わせを考え、向う3年間ほどで一応の体系の体裁をととのえようとしている。現在は依然としてイメージ開発の段階である。

2. 住居集合集落構造の研究 この研究は、近代の建築都市計画論の弱点である集団的視野からの環境計画の補充を目標として、かつて集団生活が好適に営まれていた

とみなされる中世集落の物的環境を空間構造のうえから把握しようとするものである。具体的には、47年のヨーロッパ・アフリカ集落調査は、当研究室を主軸として13名のメンバーで行った。この調査では、特にアラブ化されたベルベル人集落の資料を得ることができ、予想以上の成果をあげることができた。いくつかの文化圏をよぎったせいか、空間的な構造の異差が明快に見えて、50を越える集落についての調査から、最終的に3つの構造モデルを抽出した。48年は、日本の土地利用状況特に農業生産の実態把握の計算——終局的には農業生産には土地を必要とするという単純な仮定にたつての日本の食糧自給率の計算——をしたあと、自給自足を強いられたと考えられる日本の島の集落構造の調査を行った。調査対象は、伊豆七島、九州の五島列島、裏日本茨周辺の島々、四国宇和海の諸島あわせて20ほどの集落である。これらの集落の構造的差異はさだかだけでなく、先の国外調査に比して下位の構造概念をどのように把握すべきか現在のところ結論がでず、本年も調査を継続して検討を深める必要にせまられている。しかし、分析過程で道路のネットワークを全体的にとらえるひとつの手法を見出した。これは島という特殊性つまり外部から進入するものは港から入るという条件のもとで見出した手法であるが、端的に言えば、道路をツリーとみなして、刃としての道路のエレメントにどれほどのあいまいさがあるかを調べてみると、いくつかの標準パターンが得られた。この手法は計画論に展開できそうである。本年は第2回海外調査を予定しており、調査対象は中南米11ヶ国である。この種の研究は蓄積が第一条件であるので、着実に研究をすすめ結論を急がないように心がけている。

3. 住宅地計画—方法論と設計 昨年から、これまでの集落研究などを基礎として、実際の住宅地計画を行うようになってきた。新しい環境にたいする配慮を具体的にどのように払えばいいかが、現在必ずしも明快でない。これまでの都市計画手法をもってしてはとても解答はだせない。したがって過去の実例を検討し、新しい調査法などを導入してゆかねばならない。ひとつの例が生態学のうち植生の把握である。造園あるいは景観という関点からでなく、環境保全の関点からの植生計画論は皆無といってよい。当研究室は、横浜国大の宮脇教授に基本から実地訓練をうけ、ようやく植生についての基礎的な考え方を身につけた。これを設計のなかにおこむ方法論とするためには、まだまだ学習を重ねなくてはならない。土質的な環境把握についても同様で、東工大の岸田助教授に教をこうている。その他数多くの先生方に環境的視野からの教をうけており、設計にもりこんでいるが、これらを体系的にとらえて環境計画論に仕上げるのが当研究室の夢である。(原 広司記)